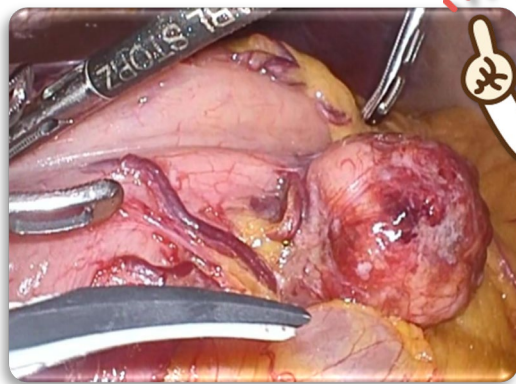
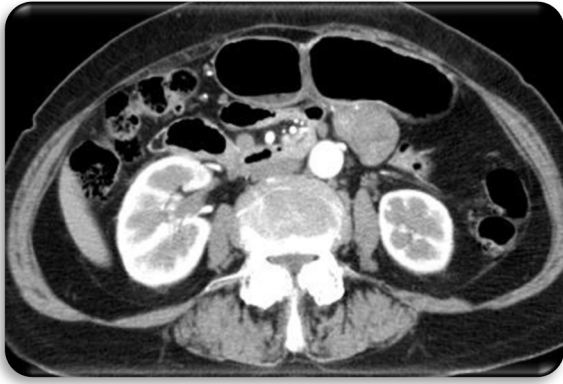


胃GIST ってどんな病気？



胃GIST（ジスト）とは、胃の壁にある筋肉や神経のもとになる細胞から発生する腫瘍で、正式には「消化管間質腫瘍」と呼ばれます。がん（悪性腫瘍）の一種と考えられていますが、性質はさまざまで、ゆっくり大きくなるものから進行しやすいものまで幅があります。

原因ははっきりとは分かっていませんが、細胞の増殖をコントロールする遺伝子（KITやPDGFRAなど）の異常が関係していることが知られています。一般的な胃がんとは発生の仕組みが異なるのが特徴です。

症状は、初期のうちはほとんどありません。腫瘍が小さい場合は無症状で、健康診断の胃カメラなどで偶然見つかることも多いです。しかし、大きくなると、みぞおちの違和感や痛み、胃もたれなどが現れることがあります。また、腫瘍の表面が崩れて出血すると、黒い便（タール便）や貧血がみられることもあります。診断には、胃カメラ（内視鏡検査）が基本となります。胃の内側から見ると、粘膜の下にできる「こぶ（粘膜下腫瘍）」として見えるのが特徴です。さらに詳しく調べるために、超音波内視鏡（EUS）やCT検査を行い、大きさや広がり进行评估します。必要に応じて組織を採取し、特殊な染色（免疫染色）でGISTかどうかを確定します。

治療の基本は手術で腫瘍を取り除くことです。転移がなく、切除可能な場合には手術で治癒が期待できます。現在は腹腔鏡手術など、体への負担が少ない方法で行われることが多くなっています。一方で、腫瘍が大きい場合や転移がある場合には、分子標的薬による治療が行われます。代表的な薬としては、イマチニブがあり、腫瘍の増殖を抑える効果があります。手術後の再発予防として使われることもあります。

胃GISTは、通常の胃がんと比べてリンパ節への転移は少ないものの、肝臓や腹膜に転移することがあります。そのため、治療後も定期的な検査で経過をみていくことが重要です。

まとめると、胃GISTは胃の粘膜の下にできる特殊な腫瘍で、多くは無症状で見つかります。治療は手術が基本ですが、必要に応じて分子標的薬も使用されます。早期に発見し適切に治療すれば、良好な経過が期待できるため、検診や検査をきちんと受けることが大切です。